

法界獨斷演說
北島道龍

013766-000-7

特47-474

法界獨斷演說

北島 道龍/述

M24

ABA-0255



ex 680

158

法界獨斷演說

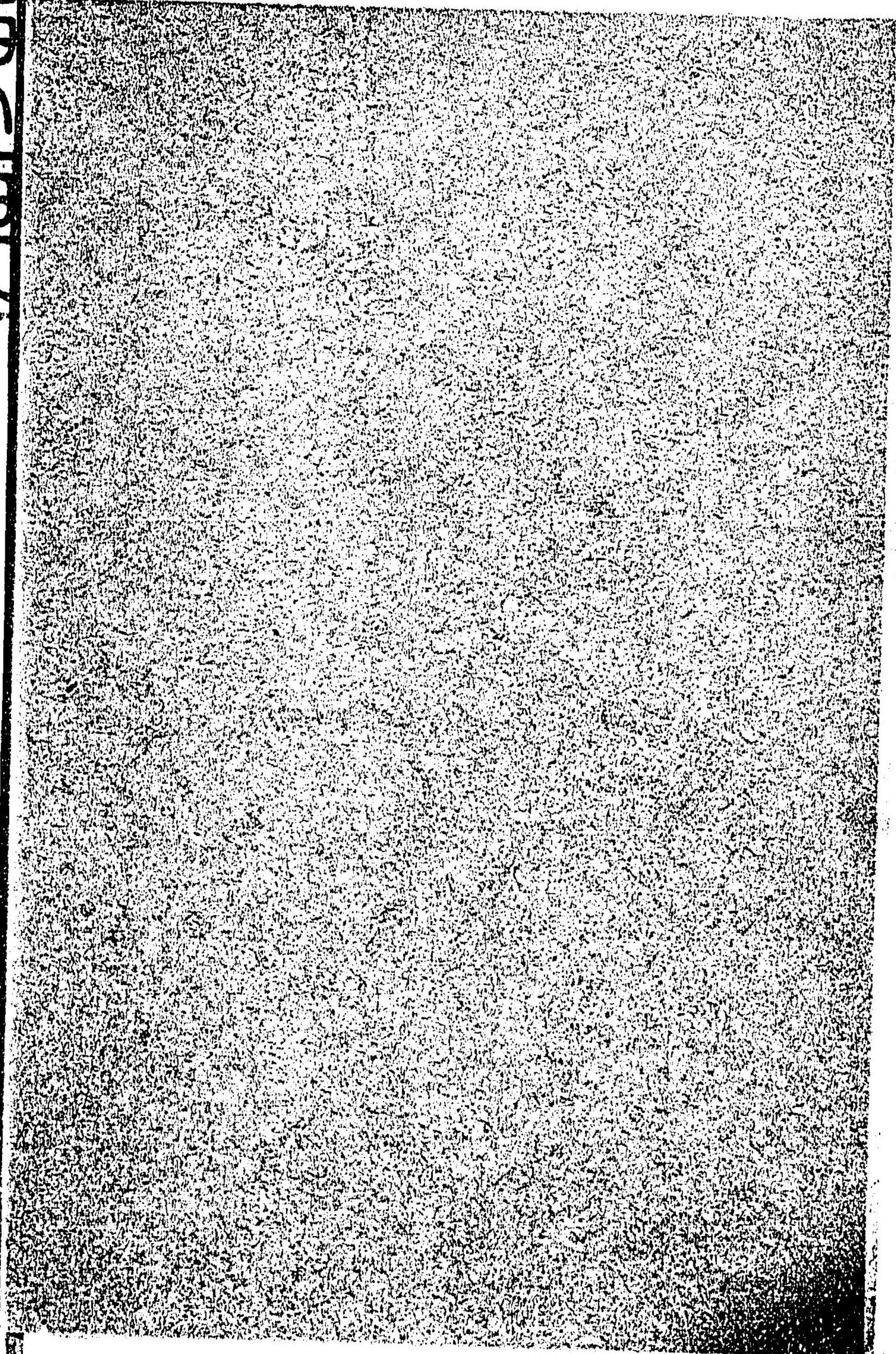
北畠道龍師 久山隆筆受

特47:
474

東洋
龍道



北 畠 道 龍 師 肖 像

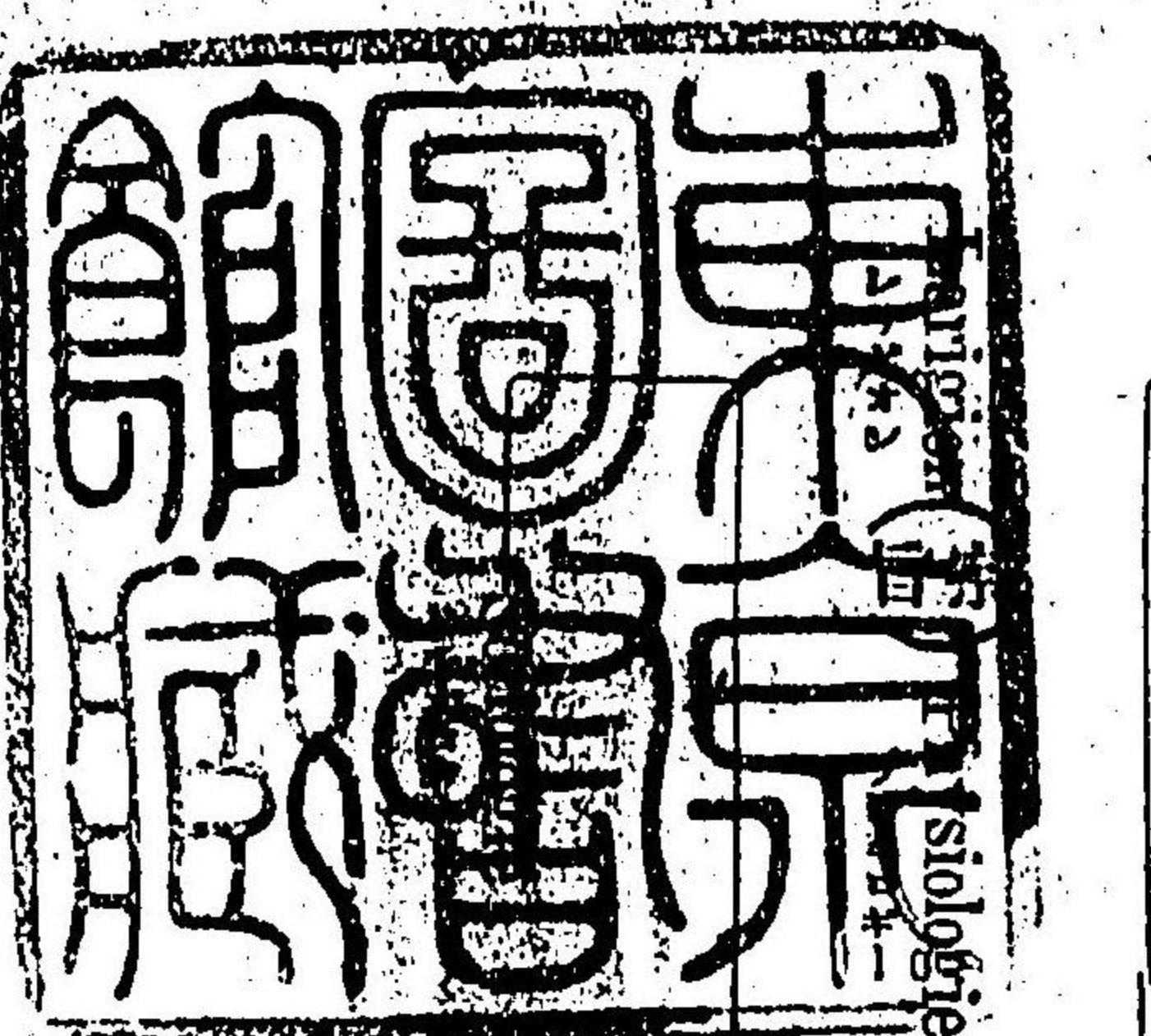




法界獨斷演說

北畠道龍 師述 久山隆 筆受

Biologie (己ニ向フテ己ニ修ムルコト)



(精神學)

(外ニ向フテ外ニ修ムルコト)

Wissenschaft
ヴィッセンシャフト

Kirchefinanz
キルクヘフィナンツ

Kircheverfassung (憲法)
キルクヘヴェルファッスウング

(學文)

(會計)

Grundstudium (根原學)

Helfstudium (同類補助學)

Literatur (略學)

Pristinanz (僧徒會計)

Kirchefinanz (寺門會計)

此處に掲げたる圖面に因りまして我が日本全國の國體國力に就いて私の見る所の主義を大略お話し申して見ませうそ

ここで今將に言はんとする所はまさしく我が日本の今日我が
 此の四千万の大衆諸君如何に今日の事を思はつしやらる、
 かば知らぬとも概して之を言へば實に今日程大切なる時は
 わりません抑此造化真理の道理に基づき又進化の大法に因
 りて世界全國の有様を觀察するに先づ *Altjahre* と云ふて昔の文
 明即ち古の時分の人民の文明と云ふものは *Jagercultur* と云ふて
 此の時代と云ふものは子、百姓が大根じやの蕪じやのと云ふ
 物を採て食ふと云ふことの、マダ開けなんだ時節、サヤと云ふ
 て食はせ飲まずには生活もして居られぬに因りて、漸く鳥や
 獸を追ひ廻はし……今の様に鐵砲もなければ網もない手や
 棒で漸く之を捕る食ふて已の生活を計ることを知つた丈の
 文明じやによりて之を *Jagercultur* と云ふ、古代の人民の生活であ
 った所が *Mittjahre* 即ち中昔の時分の文明と云ふものは *Hirtencultur*

と云ふて牧場を造り、牧場を拵へて馬や牛を養ひ或は豚、羊を
 養ひそう云獸類の繁殖する牧場にて之を養ひ之を繁殖させ
 て捕て食ふことを知つて來たのである、兎に角文明が其れ丈
 進んで始めは手や棒で鳥や獸を、捕て食ふたのが此度は之を
 養ふて取つて食ふことになつて、其れ丈人民が賢ふなつた、夫
 れから *Neujahre* と云ふて *Neujahre* とは即ち近古代の文明を指し
 て云ふもので此の時代になつた其の時の人民の文明と云ふ
 ものは、何にも生きた物ばかり殺して捕て食ふばかりではな
 い、或は蕪はかうして植ゑれば出来る、大根はかうして植ゑれ
 ば出来る米も麥も培養さへすれば一粒の物は百粒にも二百
 粒にも培化する、されば少しく力を用ゐて、其の得る所を澤山
 にして、生活の道に安心安堵をすることの出来ることと云ふのが即
 ち之を *Ackercultur* と稱す、*Acker* とは百姓すると云ふ意味で百姓が

米や麥、大根や蕪を植ゑて培養をすれば其の成効は充分に出
來ると云ふことを知たのがこれ近古代の文明の有様であつ
たのじや

此くの通り時代も進めば進むものじや、大昔の文明から、中昔
の文明に移り、また此頃の文明に進んで、是れに就いて人民我
れ々の生活も全く其の所を得ると云ふことになつたのじ
や、之が即ち世界の造化眞理の大法の有様であるコリヤ全く
^{Politische} ^{Economie} の裁判で即ち經濟上の裁判から斯く分たので
ある随分世の中は進めば進むものである、段々に斯くの如く
進むのは是れ即ち世界造化の眞理の進歩する有様であると
云ふことを、能くお臍の下に納めて置きなされや（此の時暗業少しく笑ふ）
所で我が國は推古天皇の御宇より、凡そ一千年來と云ふもの
は平家源氏北條足利徳川の五代の幕政打ち續き、その國体は

帝國でありながら幕府の翳雲之を覆ふて、天子の御威稜を凌
壓して我が手に采りて治めたるが、即ち日本代々の幕政であ
る、所が是れ等の政治と云ふものは、固より唐の太宗の制度を
移したるもので即ち ^{Unendlich} ^{gewalt} ^{monarch} と云ふて即ち限りも
なき、威勢政治、切り取り政治と云ふ事にして己が勢力で四百
餘州を斬り平げ、否六十餘州を斬り平げて、己れに向ふて頭を
揚げる者があるか、イヤ閉口仕つた……夫れじやマア太平じ
や子ゑと云ふ有様であつた

所が今より二十二年前、我が天皇陛下は親ら政治を執らせら
れて、そして我れ々四千萬の人民の爲に、從來の政治を改め、
文明を綺羅美やかにして我が日本の國体を健全にし我が日
本の國力を逞くして印度や煥太利のやうな覆轍を踏まぬこ
とにして、いつく迄も人民我れ々をして安心立命させて

やらうと思はし召さるゝが我が天皇陛下の賜ものである（ヒヤク）即ち是れ等の深き思召に依りて、治められるが今日の改政なれば我れく人民たるものは、能く之を腹に納めて、將來國の爲に、我れく人民の本分を盡すべきが即ち我れく人民の心得と云ふものである（ヒヤク）日本人民たる者はどこ迄も我が僭夫れに就いても我れく日本人民たる者はどこ迄も我が國の爲にはなるべきものと思得又は我が國の力には成るべきものと思ふべき善なるが承はれば亞細亞地方で天竺や濠太利亞を初めとして、英吉利の爲に斬り取られた國々が昨年迄に三十九ヶ國で、其の御鉢が今將に廻らんとする今日ヒヤクによりて、若しや我れくが怠惰の志、國の大事を忘れて暮るやうなとであつたならば、印度の覆轍を蹈むかも知れぬ、濠太利亞のやうに國を奪はれるかも知れぬ、それヒヤクから天子政

府の御配慮のみに打ち任せて、我れく人民たるものがうつかりしては居られぬ、何でもかでも愛でどうしても陰ひ留めにやならぬと云ふ所の精神を持たなけりやならぬ夫れだけの精神はしツかり持たねばならぬと云ふものである（ヒヤク）夫れに就いて希臘の語に *Ideal* と云ふことがあるが之はいろくのよきものを取り集めて一つの善き物を拵へるを云ふとで其れでも此れでも其所でも此所でも其れからも此れからも善い物を悉く引き揚げ取り集め一つの物を組み立てることを *Ideal* と云ふなり譬へば、美人の姿を畫くに、もせよ又美人の石像を彫るにもせよそちらの女の顔面がよければ夫れを取り来て又こちらの女の姿がとも云へぬ有様であれば其の姿を取り來り又この女の物体が愛嬌のたつぷりしたる所があればそれを取りこれも取りて婦人の一番善い所の

物を集めて拵ぬるから、一言もないじやねエ上々吉々じやね
 る(爾紫笑ふ)斯様に其ちらからも此ちらからも宜き物を取り集
 めてこしらゑたる物を稱して *Ideal* の組み立てと云ふ、
 今や我が日本の天子政治を改めて、本年二月十一日、あれアノ
 七十六ヶ條の憲法を、御發布あらせられ、希臘言葉では *Constitution*
μοναρχική *μοναρχία* と云ひ獨逸言葉では *Verfassung* *Monarchie* と云ふ之を日
 本に翻譯すれば憲法政治となる此の憲法政治たるや各國に
 歴檢してろの最も善きものを折衷して組み立てたるものに
 して是れからも其れからもろの善き物を取り來り集めても
 つて一の憲法政治をお組立に相成つたが即ち我が朝の七十
 六條の憲法にして實に我が國の如きは *Ideal* の世の中と云ふ
 可き哉夫れ天子の御手許では此くの如く各國憲法の粹を抜
 き精を取て、まゐどうやら、こうやら、あの通りの憲法を御制定

に相成つたが、其れに就いても、政府の憲法と共に、寺も亦之に
 應じて己れの憲法を作らなけりや、ならぬのである(ヒヤ〜)政
 府の憲法が出て、其國の秩序を整ふれば、己れも又寺の憲法を
 作り、政府の憲法が右に働けば、寺の憲法は、左に働いて共に政
 府と寺と組合体して以て此の國の國體を高め國力を強め日
 本の文明を進むべきものである、一方に於ては政府の憲法が
 我れ〜の身体の運動秩序を立つる爲に造られ、身体の運動
 は此のからだの行ひ……此我れ〜が、男でも女でも、ギアッ
 と生れて、うんと死ぬる迄、一生涯の間の、身体の運動からだの
 運動の *Ordnung* と云ふ秩序次第……此の秩序次第が、崩れてか
 らは天子の尊ひとも知らねば、人民の下に有ることも分から
 ぬ、上は上下は下上下下判然として、こゝ上の本分を盡すことも
 出来れば、下も我れ〜人民も亦其本分を盡すことが出来る

所の此の職分のある所を知りて而して運動して行けば少しも紊亂の誤まりのないことになるのである、夫れが爲に天下の文明が能く其所を得たると云ふ所に達するのじや（エヤ〜）其こで宜しむかね、政府の憲法は………身体の運動秩序を定められるが職分じや、所が此の寺の憲法………此の憲法は、我れ我れの腹の中、取りも直さき インサイド Inside といふ此の一つの精神我れ〜の精神即ち所謂思想違順總べて我れ〜の心の思ひの順序を立つる所を、働くのが、寺の憲法の職分と云ふものじや分つたかね、ナンボ一身体のがわの順序が立てても我れ〜の此の腹の中ちの精神上の順序と云ふものが立たにやどうで人間一人の一身が治つたとは云はれぬ、身体がナンボ治つても精神が治まらにやマア其の人の一身が治まつたとは云へぬじや（エヤ〜）して見れば天子の御配慮にて能く如此進ん

だる、今日に當てや日本八宗の僧侶達は否でも應でも世界の眞理に基いて以て寺の憲法はどうしても製作せにやならぬ然るに明治二十二年此の以來日本八宗の ドニキエ Donkiche 即ち八宗の各本山は未だ政府の憲法に能く適應したる寺の憲法を作つた寺は一箇寺もなし（エヤ〜）是れで寺の本分を盡したものと云ふべきか、コリヤ未來が大事此の世は兎もわれ角もわれ是を今一度ひつくり返へして云へば此の日本は野となれ山となれでは………此の日本が野となり山となつたら我れ〜は如何にぞる國體國力はドナイになるのじや是れは此の度出版したる法界獨斷に残らず認めて置きましたから追々取て御覽なされ

夫れに就いて此こに掲げた所の圖面、コリヤ何にも北島一人してやらねばならぬことはないじや此圖面が八宗各本山各

僧侶達はこれが分るることになるならばこれに因りて憲法を造る事も出来るのでそれは皆お坊様の力次第で出来るのであるのじやか坊様とても固より日本人民には違ひはない………違ひなき以上は、日本人民同様に人民の本分を盡すことを心掛けては如何でがす（言やく）………されば八宗僧侶達の心得になるであらふと思ひ升所を認めたのが此の一枚の圖面である、夫れで此の圖面を解き明かしたのが法界獨斷………是れ迄數ヶ年の間北島が改正をせにやならぬと言いましたたが未だ我が本來の主義を示さなんだと云ふものは未だその示す順序が立たなんだ爲めである點を凌ぎ寒を侵して東北七州及び北海道又關八州に至る迄我が主義の如何を數百萬の人民に訪ひ試むる所が何れも勇んで承諾をせられたに因りて今は將に其の時こそ至りければ

ならば東京に罷り歸り豫ねて抱いたる所の法界獨斷を著して以て我が本心を打ち明かし、是こそ滿腔の我が主義であること云ふことを示したならば八宗の僧侶方もア一成程………我が宗旨の如此衰へたるも成程我が宗旨の振はざる所以は爰に在り爰に在ると云ふことが始めて分りました、さすればコウならなければならぬか、うつかり油斷はならぬ此の趣旨に基いて我が宗旨を改めて以て己れの本分を盡し天下の人心を興り知ると云ふ所の精神も皆此の圖面にあると云ふことを合點し夫れのみならず四千萬の大衆諸君と雖も宗旨は如此ならぬばならぬと云ふ所の道理を始めて心の中に合點するのでござらう（彌蒙ハ會得セリクと呼ぶ）らんならと云ふて、北島が Concret の獨り考への日本丈で考へたのではない之が爲めには傳教も弘法も支那迄はまゐられたが未だ嘗て天竺へはまゐ

られない、そんならと云ふて支那からは彼の有名なる玄奘法
 憲等を初め七人も八人も天然へはまいられたが日本よりは
 誰れもまいらぬとあつては第一、國の耻なり人民の耻なり、ま
 してや坊主の耻辱は云ふまでもなしと、一度思ひこんでは少
 しも安閑として居られずと決思し、釋迦の墳墓にも敬拜し旁
 々印度古代來の宗教上の眞理や歴史又は文學の沿革、國の興
 廢等に至るまでも調べ得たきものと考へ、必死になつて彼の
 國に渡り「ノルデン」ジューデン「オステン」ウエステン「ミット、イン
 ジーセ」の五印度を跋躋し、取り調べてまいつたのみならず、歐
 米各國に至りても其の國々の Bishop^{BISHOP} や Professor^{PROFESSOR} 杯に逢ふた計り
 じやない、短かきは二三ヶ月、長きは一年、六ヶ月、七ヶ月間も打
 ち續けて暮れても明けても毎日々々互ひの眞理を比研して
 取り調べましたに就いても、我が國のことを思ひ、我が國の事

を慮り他日國に歸つたなれば如何はせんと我が本國の爲め
 に色々の事を質問し種々折衷を加へてやうく私の考へを
 まとめたのが此の一枚の圖面、此の圖面を解き明かしたのが
 即ち法界獨斷の一部の書物……隨分と骨を折りましたが斯
 く認め上げた其法界獨斷の各々方取つて御覽なされ始めて
 日本政治家の職分と又は宗旨家の職分を知るに足るもので
 あらうと思ひます

サテ先づ此の圖面に就いてお話を致さうならば *Lerigion*. と云
 ふは宗旨と云ふとしてこれは豈に日本の宗旨のみならん
 や、世界中の宗旨を、指したので英吉利では *Prespithian*. *Independent*.
Exceoppe. 獨逸では *Interprotestant* 又羅馬では *Romankatholik* *Griechekatholik*
 其れにも是れにも、地球上に有る所の、凡ての宗旨を、此に引
 き出して *Lerigion* と云ふて、日本語を以て之を云へば即ち宗旨と

云ふことである(諸君々々)

Physiologie は ^{Phänomen}Physiosophy 學の中に胚胎するもので最も必要の品であります、之を日本に翻譯すれば精神學と云ふものなり日本帝國人民我れくたるものは誰れか精神を持たぬ人があらうや、一人として精神のない人間はありませぬ、其の精神は今日日本帝國に生れた我れくの精神の持ち方の初めより并に未來は何處へ行くか行かぬかの精神の終りまで深く調べたのが此の精神學と云ふものである然るに立名の順序を云へば始の名は精神學次ぎの名は宗旨と次第して即ち精神學とは第一の名にして之れを ^{Eigenamen}Eigenamen. 本名と云ふ也又た宗旨とは ^{Gattungsamen}Gattungsamen. と云ふて種類を分ける爲めに第二につけた名にして今一二の例を擧げて之れを云へば念佛を宗としてるの精神を引き立てる所以へに念佛宗と云ふ又は坐禪觀

察を宗としてその精神を引き立てれる所以へに禪宗と云ふものにして即ち第一の精神に基ひて第二に宗旨と云ふ名の出來た手続きは是れにて知りなさいやエー歟子(大笑)然るに世の中に下等の人種はさしかきて上等人種の中に原書讀み又は學者と云はれる人のろの中に我こそは無宗旨なりとはこり高ぶる人の有るは如何に聞らき國の残りものとは云ひながら、そんな我が身しらすの馬の字鹿の字殿のあるは皆此の精神學と宗旨の名前の順序の分らなかつた昔しのことと、おもひあきらめて、ろんなことは以來は止めなさいや、識者の國の人に笑われるぞエー歟子(又た大笑)然れば精神學は第一の本名にして宗旨と云ふは第二につけた名なれば、よしや第二は御嫌ひでも第一の精神學に於ては凡そ入たるものが、お嫌ひも、お好きもある筈はなひ、抑も政治學の大原、宗旨學の大

本たる精神學は、さらいも好きも有る筈では無いと云ふことは知れました子、此の精神學を槩稱して Indische Philosophie と云ふものである

然るに今や將に條約改正人民雜居の境に至り、外教の益を來入せんとするの時に當りてや此の我れ、四千萬人民の精神が若しやその宗旨に化せられて我が國、人々の精神が他國に散り取られたるのあとに、差し引き残つたものは、葉人形……(ヒヤク) 何に程人民が多くあつても、葉人形であつては、とても我が帝國の國體國力を維持して此の國を守ることは、サア出來にくい……(ヒヤク大喝采) 其こで段々と世界中の取り調べを致した上で此の、東京に Philosophy の精神學大學院を建て、我が四千萬の民心を爰に修めて國の力とならんと大望を起したのヒヤ(大喝采)

夫れで此の精神學を區別すれば、第一に Biologie 第二に Sociologie 其の第一の Biologie とは内らに向ふて内を治むるといふことにして信心ヶ條のいわれなり第二に Sociologie とは即ち外に向ふて外を治めると云ふること此精神學に付いては尤も必要なる箇條である所で私の佛教再興と云ふものは全く此の Sociologie の下に附て立つるものにして彼の已れに向つて己れを治むる Biologie の下に附いて立つる所ではありませぬことは能く、御承知おかれたし即ち此の Biologie の信心ヶ條と云ふものは、凡べて此の精神學に付ては此の信心ヶ條を治むることは最も人の必要なれども之れを修むるには此の Sociologie の修め方が亦た尤も必要である然るに此の Sociologie の振り回し方が悪るひと、人々の心得かたが此の世は兎もあれ角もあれといふことになる、今一つ強く云へば假令ひ我が

國は野となれ山となれトウでも搦やせぬ我さへ極樂へまいりさへすれば宜いと云ふやうなことに成りては是れ即ち日本人民でもなければ馬か牛と同様の者と云はねばならぬ(ヤク)

されば諸君よ凡そ我れく人たるものとして我が精神を修め老に居ては第一我が爲めにもならねば國の爲にもならぬなり夫に付ても此の *Sociologie* の回わし方が悪るいとこへ舟を持ち付るかも知れないやれく危なひことと有ります夫れゆへに此の *Sociologie* の修め方が悪るかつたらば我れく精神の修め方も分らねば我れく人民の本分を盡すことも分らぬ而已なら老之れが爲めに日本佛教は腐つて仕舞ふのヒや此の精神學が腐れば我が日本の人心も亦た従ふて飛散せんとすれば我が國の維持は六ツケ敷きなり夫れゆへに此の

Sociologie と云ふものはどうでも能く修めねばならぬ者にして然して丁度政府の政治上に相ひ合せて之を云へば政府の *Verwaltung* と同じことにて此の *Verwaltung* とは譯して云へば行政と云ふことにして憲法政治の上下兩院で議し揚げた法則へ恐れながら天子の *Sanction* の御許諾の御印形がすわりて後ち此の憲法が彼の *Verwaltung* の行政となりて其の憲法の目的を達するものにして是れを又た政府の *Sociologie* と云ふても可なるものである然して其の行政の行ひ方が低くければ、其れだけ文明が低くなり、文明が低くければ低くひはと國が弱いのじや、若し此の行政の采り方が高ければ高ひはと文明が高く文明が高ければ、國は強いのにじや、即ち國の強弱文明の高低は、一に此の *Verwaltung* の行政の仕方如何にあるのである(ヒヤク)

之と同じく宗旨上の *Sociologie* にして其の采り方が宜ければ其

の宗教は益々高かるべし其の宗教ますく高ければ高きは
 其精神學の薫りの高く聞ふるは素とよりの數にして若し
 是れが低くければ、如何程 *Biologie* の信心箇條の内に向て内を治
 むる所の力らが強よかりしとも何の役にも立たぬ、所謂國の
 憲法が如何程金令玉條でありても此の *Verwaltung* の行政の采
 り方が下手でありたならば憲法の目的を達することはなら
 ぬと同じく此の *Sociologie* の廻し方が悪るかりせば亦た此の精
 神學の目的を達することにはならぬ故にどうしても能く此の
Sociologie の手順を修めて我が帝國四千萬の人民たる者の其の
 人心の方針を知ら令め都て上たるものは其の上たる者の本
 分を推し又た下もたるものは其の下もたるもの、本分を盡
 して以て我が國の國體國力を健全にして、彼の印度の覆轍を
 踏ませ又埃太利の敗跡を踏まぬ心得でころ印ち日本人民の

精神と云ふものである(ロヤ〜大陽采)

借其の *Sociologie* の働きをなすに就いてはこう云ふ三つの働き
 を要する即ち第一は *Wissenschaft* の學問、第二は *Kirchenfinanz* の寺の
 會計、第三は *Kircheverfassung* の寺の憲法此の三つの物が相待て
 其の働きを全ふするものである、ろして其の一番の *Wissenschaft*
 と云ふは、一口に之を云へば學問と云ふことにして學者でな
 ければ、到底此の *Sociologie* を維持することは出来ぬ話である所
 謂無學無識の徳利坊さまではいかぬことで……(大筈あるか
 ら學問のイヤなお方は坊主になることは、お止めなされたが
 宜しかろう(大筈講采))
 其次の *Kirchenfinanz* 即ち寺の會計と云ふことは、コリや最も大事
 のもので、其の會計は寺自ら自らを維持する所のものにして
 最も大切なものである、其の會計はどうして執る者かと云へ

ば是れも矢張り其の仕方如何にあるとて、今日、日本のお坊
 様が毎日々々三錢五錢のお布施の貰らい溜めを以て、生活を
 するやうな者ではない畢竟今日お坊様の無學無識無氣力貧
 乏の衰形を來たせしはつゝまり此の會計法の立たぬから此
 の如きの大衰頽を來たせしものなれば此の如き憲法新世界
 の將來に向ふては此の *Kirchenschatz* の寺の會計は、最も大切のも
 のなれば深く注意せねばならぬ(天鳴采)

次に *Kircheverfassung* の寺の憲法は、今日政府に於て憲法を定
 められたる如く寺に於いても亦一の大憲法を定めて以て其
 の爲す所の方針を定めねばなるまい、夫れで其の方針を定め
 た所で、此の三つのものが相集つて以て一の寺の *Verwaltung* の
 行政を爲すものである、寺の行政を組み立てたものである、斯
 くまつかりしたが *Sociologie* の寺の行政に依らば其の寺のしつ

かりするとは甚だ見易き道理である就いては次に此の學問
 じやねエ……是れは最もむつかしきもので只大學や高等中
 學の卒業生位では、とても間に合はぬ先づ第一には根源學、第
 二には同類補助學、第三には諸學兼學と云ふて、此の三通りの
 學問をせねば人の上に立て以て人の精神を預り知りて其の
 本分を盡さしむる様に説き諭すことは出來ぬ、

即ち根源學とは *Grundstudium* 即ち *Indische Philosophie* の學問を能く勉
 めて以て、其の次ぎには同類補助學と云ふ所の *Helisstudium* なる
 歐米各國の同類、即ち平禮教や猶太教や耶蘇教等の諸學の根
 源を兼尋し第三に *Literatur* の諸學即ち物理學にもせよ、天文學
 にもせよ其他の一切の學問を勉めて以て、其の教授の本分を
 盡すに於いては少しも差し支へのなき様に勤むべきが此の
Wissenschaft の組み立てにして、之を修めれば *Sociologie* の外に向て

外を修むることは出来るのである(ロヤク)

次ぎは *Kirchenfinanz* と云ふは即ち寺の會計にして、此の會計を分ちて *Pfistfinanz* の僧侶の會計と第二は *Kirchenfinanz* の寺の會計の二つとして修む可きものなり然るを日本宗旨の衰へを來たしたるものは畢竟して此の會計法の如何にあるものにしてまた僧徒の無識や世の輕呑を來たしたるものも、又此の會計の如何にあるものにして此の會計に就いて、最も注意して修めねばならぬ所なり、若し之を修むることを知らざれば此の宗旨の改良は覺束なきなり嗟乎三千年來の古る會計を杓子定規に持ちこたへて今以て之れを改むることを少しも知らぬ寺の社會も分けて云へば坊様の内ちに之を改良する識者も無れば又た門徒の内ちに之れを救正する有識者も無く門徒も馬鹿なれば坊様も亦た馬の字、である(大笑) つまり同じ馬の

字の寄り合ひから遂にお坊様は無學無識無氣力貧乏の衰態を來たし終に今日の如く宗旨の大衰敗を來たした所以じや誠に悲哉嘆かわしむ哉や……………(ヒヤク懺悔々々と叫ぶものあり)

所が北畠が今度諸君に御相談をとするのも、此の一義である、學問の興廢如何んに依りて宗旨の衰敗を來たすは勿論なれども又た此の會計の整否如何に依りて亦た宗旨の衰敗を來たすの譯けも有れば都て是れ等の敗原を改めて一日も早く立派な行政法を組み立てんと思ふたのが遂に此の佛教再興の大原となりし所以のもので有ります宜しく考へ賜われかし次ぎに *Kirchenverfassung* の憲法の *Formel*(組み立て方と云ふ事なり)即ち憲法の組み立て方と云ふことにして之れに就いて三通りの人が必要なり、今之を政府で申せば第一に政府は將に開かんとする所の國會議院に向ては先づ原案を差し出しなさる

その原案をば國會が之を議決する其れには此の *Initiative* 原案
 の出し方が大切で之れを出すには人がなければ恰も瓢箪の
 水を出す様なことではならない又た第二にはるれを議 *Resol-*
^{スル} *sumen* する國會議員が能く憲法政治及び文明の意味にも通曉せ
 ねばならぬ又た第三に其の議決に向ふて天皇陛下は *Sanction*
 の許諾の御印を下ださねばならぬ其の許諾の御印に就ては
 最も天皇陛下の御配慮遊ばす所にして國會の議決ならば必
 ず御許諾なさると云ふことには參らぬ國の爲め惡しければ
 之を許諾せず人民の爲に惡しければ之を許さぬも可なり實
 に天子の上に在り *Sanction* の御印の捺し方にて憲法の得失が
 定まると云ふ位ひの者にてあるこれらは天子の御心得なさ
 るべき所なり
 夫れに付ても我れく國民たるものは能く右等の道理をこ

ころへ其の代議員となりて出るにせよ兼て是等の所は能く
 く辨きまへ置かれねばならぬ善なり然るに今日の世態を
 見るに政治の何にもものたるを了せざる人々の或は何に黨歟
 黨と云ふてそこに團まり彼こに團まり途方途徹もないこと
 を言い散らし騒ぎ回わるものも少くなからざるやうなこと
 でばとても眞の國典たる議事を興かり揚げることは覺束か
 無きぞかし是れ等は人民たるもの、心得べき所なり
 之れに就ても分けて大切なるは政府の人々にして唯お位い
 の高いばかりではいかぬ唯その人を得ざれば大いなる大敗
 を引き出さぬとも云はれませぬ是れ等は政府の心得べき所
 なり

之れに就て獨逸の *Physiophy* の *Professor* Zehra 氏は *Wenn die Aברים*
^ノ *so* *Versetzlichind* *die* *Niemandader* *Wichtig* *und* *Zweckemess* *handhab* *so*

(Steuern mer über Vie und) と云はれて假令以憲法は如何はど能
 く具はりて有りても之れを能く其の目的を達せ令むる所の
 誰れもが無かりしならば其の憲法は善きことを爲すよりは
 却て悪きことを爲すで有ふと云ふ意にして即ち上に述べし
 天子政府人民の此の三所の人々がお粗末でありたならば、と
 ても憲法は立つても多くは無功有害に屬すると云ふことに
 して天子政府のお注意なさるべきは知れたこと其の中に我
 れく其の一つに居る人民にして然かも國典の大原に與つ
 かる所の者なれば分けて注意をべき今日じやと云ふことを
 能くくお臍の下たに入れて置き妄りな運動などは決して
 く成さるゝなや分かりましたかエ(諸君々々)是れで分つたね
 (分つた分つたと叫ぶものあり)

サア是が分からは引き續いて寺の憲法じやが寺直ちに政府
 の憲法に依りて己れの憲法を製作して東崖の所謂る鐵鐵の
 低仰して押したり引いたりする間だにわのかたき鐵をとら
 かす如く政府の憲法と寺の憲法が互に低仰映對して久しく
 こり堅たまりた人民の頑習を淘汰して善き人民を助成して
 國の力らと成るべきが寺の憲法のはたらきと云ふものじや
 が、サア此の寺の憲法の *Formel* の作り方に就いては第一管長の
Sanction の許諾の仕方と第二寺の政府(坊サマノ政治)の *Initiative* の原
 案の出し方と第三に議員(寺の門徒社會)の *Beschluss* の議決が善く無け
 りやいかぬじやが又た兼ねての養いが無れば、いかぬのじや
 が諸君は今日の八宗の人々は是れがいけると思はしやるか
 いけぬと思はしやるか、マ一之れをどふすると思はしやるや
 之れが立たねば宗旨の天下に與づかる所以んと云ふものは
 サツパリ氣抜けして仕舞いそれに御遠夜参りと葬式扱いの

二つに止りて唯未來のものと計り成り果て此の今日とは、サツバリ離れてしまひ之れから先きは、マゝどうするつもりか

夫れに就て、日本國中八宗の管長は、此の許諾の允許をする力があるか又た各宗の政治を取て居られるお坊様方、宜しく其の憲法の原案を出す所の方があるか又た其の門徒社會も、其の議事堂に出で、宗旨が宗旨の眞理に基づき、宗旨の天下に預り知る所以を知つて、愈々寺の憲法を議決する力があるかあるまいか、果して諸君は之を如何にと思ひ玉ふや、いきそうなものか、いけろうなものでないか、サアトウジヤ(薩摩)獨逸の諺に *Wer gut suft findet gut* と云ふて何に事に就けても善く考ふる者は善き事を見出すと云ふことにして能くく分別熟考してこそ善き事をも考へ出して又た世の中の釣り合いも

程善く取れることも有るなれどかく漠然たる八宗の有様では世のますく開けるに従ふてはますく無學無識無氣力貧乏と落ち行くよりは外に仕方是有るまいとさすれば國體國力の維持どころ歎我が身一つを持つことさへもならぬ場合いに成り行くは、もはや遠からぬ内ちに在りと思はれてそろに哀れに思はる、なりさする時は僧分の本分も立ねば又た人民の本分も碎けてしまひ僧分でも無れば人民でも無い者にならふと思はる(ヒヤ〜大喝采) 今日はまだ之に就いて、委しく申し述ぶるつもりであるけれども、最早時間もないから是れで仕舞と致します残り日は明日(喝采)

第二

昨日は漸く一席だけ辨じ終りましたが、日の短い爲め第二席を述べることが出来ませぬ、残念千萬と心得まするによりて

今日は必ず都合よく前後二席だけ相述べたいと存じます。併し乍ら何を申すも上に掲げたるこの一枚の圖面ですが、之を説き明かしまするには、中々一席や二席で述べ盡す事が出来ません。况やこの圖面はわざ／＼一巻の書物と認め上げた位でありますれば、鳥渡やソットで述べ盡し難きは勿論であるかなれども、併しやつてゆける丈けはやつて見ませう、やつて往かれる丈け、私の舌の續くだけは、切角人民の精神の爲め我國の爲め相述べたいと存するじや、夫れでうの足らぬ所は法界獨斷の書物について御覽なされ、必ず私の説を御會得に爲ること、存するのじや、

夫れにつけても思ひ出すのは夫れ冠は其頭を飾る所以の者なり靴は其足を重うする所以の者なりと云ふ言葉が彼の有名なる文仲子と云ふ書に有る、成程冠と云ふものは我々の頭

を飾る所以の物に違ひない、立派な帽子を冠れば、冠るはど頭がろれだけ貴くして、粗末な冠を冠れば、冠るはど夫れだけ頭が賤くなる、併し乍ら其の頭を飾る所以のものは即ち冠である、亦靴もさうである、土百姓が藁で作た草鞋を履けば、夫れだけ足が軽く現はれる、之に反して立派なエム作りの靴を履けば、夫れだけ足に重みがつく、故に帽子は其頭を飾る所以の者靴は其足を重くする所以の者なりとある、是れば畢竟冠と靴とをたとへて、世の中の政治上の執り方を表はしたもので、即ち文仲子が政略上の指圖である、全体アノ文仲子と云ふ人は御承知の通り隋の末に生れ、杜如晦房玄齡魏徵杜掩など云ふ十八人の大家を生み出した先生で、隋滅びて後、是れらの人々は、唐の太宗を助けて唐の天下を開いた程の人物で、皆文仲子の門下から出たものであります、即ちこの文仲子の政略上

で上の如く冠は其頭を飾る所以のもの、これは即ち上たる者の職分を現はしたるものにして、其上たるものは、其冠を都合よく戴き、其冠を冠たるだけの飾りを用ひて、其上たる者の本分職分を誤りさへせねば、上たるものは其の頭を全うすると云ふのである、冠とは即ち天子政府の事じやねエソコテ其の頭が冠と相應せねば、奈何に帽子ばかり立派な物で、金モールで光らしても、唯力身ちらして、人民を土芥の如く侮り、人民は亦上たるものを恐れる計りで神様の如くに思ふて居ては、不都合じや、上たるものは我國の國体國力を破られてはならぬ、爰を先途と踏み固めて以て其の頭の職分をつくし、立派な帽子を冠る以上は、この國体を誤つてはならぬ、國力を弱めてはならぬ、死んでも生きてもソコに心盡しをすべきが上たるもの、本分頭も頭なり、帽子も帽子なり、各其の職に盡すべきで

ある(エヤク)亦下に居る吾々日本人民四千万の同胞兄弟は足に靴を履く靴を履くは其の足を守る所以のもので、己れ己れを守りて以て靴によりて足を全うし、人民たるもの、本分をつくしてこそ靴は足に適ふたと云ふものじや(エヤク)何んボウ立派な靴をつけても足が足でなければ、其の靴を履いた所詮もなし之に反して足其の所を得れば、靴もよく之に適ふて始めて靴其足を重んぶる所以のものとなる、一ト口に之を言へば、下たるものは其人民の本分と云ふことを知り、又上たるものも其政治を執てよく其の職分をつくし、我國の國体國力これは破られてはどないにしやう死んでも生きても、我國國体國力を健全たらしめ、上は天皇陛下の御皇統を永久不朽の萬世に傳へイッく、迄も此所を守り、頭の本分を盡して、上下諸共安心立命をさせたいと思ふのが頭に金モールの帽子

を冠り足にゴム飾りの靴を履いた所以であると云ふことである(ロヤク)

ソコで又た十子全書の見ると帽子頭に叶へば頭、頭を忘れ、靴足に叶へば足、足を忘れると云ふてある、成程大きな頭へ小さい帽子を冠ればスグに落ちる亦大きな帽子を小さい頭へ冠れば風が吹くと飛ぶ始終氣にかゝる……併し帽子が程よく頭に叶へば適當してちやんとして頭、頭を忘れることゝなる頭が頭にあるやらないやら忘れて仕舞ふてよくその頭を忘れるといふものは上たるものがおれは神じや大臣じや参議じやと言ふ所を忘れて以て頭と帽子と己れと職分とが一致して國の爲めにどこくまでも努むべし努力すべしと言ふことに爲らにや頭は頭を忘れるわけには参ら老始終氣に爲るやうな事では我が國我が人民の爲めにはならぬ、そ

れで亦た下たるものは靴足に叶へば足、足を忘れるやうになるには靴が大きくて足が小さければいつもグシヤクくして足が氣に掛つて忘られぬ又大きな足で小さな靴を履けば、足が痛うて前へ進むことが出来ぬ即ち下たるものは己の職分己の本分と云ふことを知ら老、闕然として少しも顧る所なく努むる所を努めざるが故に靴足に適は老して始終氣にかゝりソコで彼方へ固まり此方へ固まり色々の事を言ひ出すやうに爲る爰に於て人民の身体運動精神の秩序と言ふものが立た老してわき道をグシヤクくして通るやうなもので冠に靴足に適ふて足、足を忘れる所の本街道を通らぬことでは人民の本分爰に足れりとは申されぬ人民の本街道なる本分職分を忘れ老靴足に適ふやうに努めてゆくべきが日本帝國人民の本分を知たと云ふものである何卒して帽子頭に叶ふ

て頭、頭を忘すれ靴足に叶ふて足。足を忘れるやうに爲りもつて我國の國體國力の健全ならんことをねがひ上下交も相つくすべきが日本四千萬人民の本分と云ふことである（エヤ〜）

大喝采

この道理を云ふて聞かする役目が即ち *Physiosophy* 家の預かり知るべき所で、精神の運動はかく〜せねばならぬ身体秩序は斯うならねばならぬと云ふて其の運動秩序の版する所を誤らせじよく其分を守らすべきが是れ即ち *Physiosophy* 家の本分職分と云ふものであります然る所今日の日本八宗の各本山僧侶たちは其の觀察する所を誤まりて前にも申した通りこの世は兎もわれ角もわれ言ひ換へれば跡は野となれ山となれと云ふやうなことになるりて諸君よこの世は野となれ山となれと云ふことであるならこの國をドナイしませうか

決して僧侶の本分はさういふ譯のものではあるまい抑もこの精神學の大主意たるやつゝまりは我れと云ふ物を修めるに在る即ち精神學と云ふことは我れを修むる所の法で取りも直さきこの我れの精神を以て我々四千万人民の心の思想秩序を立てる所の教への法なんじやこの教への法たるものが順序もなしに其現在の精神を捨ておいて直ちに未來の精神を修めやうと云ふのは思ひもよらぬ事なり夫れ苟くも未來の精神を修めんとするなれば先づ今日の精神を修むべし死んでから先きの事をせよと云へば生きて居る間の事は爲なくもよいか知らん……甚だ怪しかる事では御座りませぬか（エヤ〜）

又死んだ先きの事を知らなければならぬものならば生れぬ前の事も知らせばなるまい（天笑）依りて孔子も甘い事を云ふ

て居られる生を知らず焉んぞ死を知らんやと云ふて生まれ
て参つた道理をも知らせして直ちに死んでゆく道理の分り
さうな事もなけりや信せられさうな事もないのに未來の精
神計りを修めよと云ふやうなことを容易に信せるを希臘の
言ばに ホーデルグレイ Vorteilheit と云ふて是を稱して妄信とは云ふなり現在を
修めてこそ未來の事をも修めらるれ現在を修めせして未來
を修めると云ふは、不都合至極の話し、今之を ロバノ Logic 上から云へ
ば一より二を生じ A より B を生ぜべきもので、二は一から出
づるものなり A は B より出るものであると云ふことは、ドコ
の國の論理より云ふも又數理上より云ふも動かすべからざ
る次第順序と云ふべきものこの現在の精神は未來の精神を
生じ、未來の精神は亦現在の精神より生じて以て未來は必き
現在より起因するものであると云ふこと、同じ道理で是が

即ち精神上の順序次第と云ふものである（ロバノ）然るにこの
秩序を敗て此の世は兎もあれ角もわれ跡は野となれ山とな
れであつて是れを以て全地球上の アントロポロギ Anthropologie ヴィッセンシャフト Wissenschaft の生理
學の規則とは申されぬ（ロバノ）大鳴采）

偕是れより歩を進めて、私の主義を説き明すのであらう、こ
で右に掲げたる一枚の圖面が分れば、諸君には日本宗教の衰
頹したるを御存知になるに相違ないそれでこの圖面を説
き明したのが法界獨斷と云ふ一部の書物で甘いか辛いかわ
で御覽なさればお分かりに爲りましやうが先づ今日は日本
八宗の衰へた原因から、わが大學院の建て方の如何を述べる
でありましやう（羅聽）

諸君宗旨と云ふものは精神學のことであるソコでこの宗旨
を坊さんの力で萬代不易の後までも持ち堪へやうとするな

らば爰に於て *Sociologie* の寺の行政が最も必要である其の必要なる内に於て第一に學問がなければならず今日八宗の各本山僧侶の行政は第一に血脈相續第二に法脈相續でやつてゐるじやねエ學問の大切なるものを捨ててゐて血脈法脈に據るから事が間違ふて來るのじや又た宗旨が頽れたのであるソシなら北島はトシな事をして居たかと云へばこの北島は憚かり乍ら和歌山藩廳に於て三百石に召し出だされ大隊から中佐大佐遂に藩の監軍となり紀州五十五萬五千石の政府の列にはいつた戦さを爲すこと四十餘度び一度拵へた鎗先筒先の人をも倒をしたが首も隨分斬り落しましたが何れも我が南無阿彌陀佛から突き出した鎗刀鉄砲であつて寔に遣作もなくやつたる堂々たる和歌山藩に於ての眞の武士眞の坊主でありたのじや(龍樂大喝采)

然かしナミ大体の苦學や難行で斯く相成たるものではありませぬ然るを日本八宗の僧侶は何れも血脈相續で上は其の宗の管長から下は末寺末派の末々までも親坊さんの檀家をば親が生んだ子新發意坊がそれを相續する早く云へば百五十の門徒を持つて居るものは其の子坊はタトヒ利口でも又馬鹿でも百五十が二千三千に殖ゐるでもなければ又百五十が二十にも三十にも減らないのだ夫れだから其のお住持は何程の名僧でも善知識でも親の代に百五十の門徒であれば矢張百五十の門徒限りでこれより多くは殖ゐぬ左ればとてトシな馬鹿坊さんでも親の代に百五十の門徒があれば夫れより以下へは減らないと云ふものであるのであらうがな(エヤ)如何となれば血脈でさへあれば其の一ヶ寺のお住持様になれると云ふ次第であるからである私が今度よく取

調べて見ると是はドウしても學問相續と改めにやならぬと相考たのは外でもない全地球上の各宗旨に於て之を鑑みたらからである彼の歐羅巴の大本山とも云ふべき羅馬法王の如きは是れ皆學問相續にして其の宗派中に於て最も徳操の高き最も學問の深き名僧知識と云ふものを世界中にて十三人だけ撰舉して其の總撰舉の撰に當たものをば之れを *Kardinal* と云ふなり法主死した其の跡繼ぎを撰ぶときに右の十三人を悉く半屋の如きものへ禁錮して他人との交際を絶ち偕て其の十三人より更に一名の最上の徳識兼高の人を撰ぶのである其の撰ばれたものが即ち羅馬法王と爲るのであり升るそれであるから法王となるには最も學問のある最も徳操の高きものでなければ爲ることが出来ないのでありますその力次第で右の大本山の法王にも爲れるのが、歐羅巴に於ける學

問相續の大原則にして各州の寺々皆な之れに倣ふ是れ即ち各宗の類れざる所以にして然るをこの學問相續を打ち捨て、血脈相續にしたものであるから日本其れ宗の如きは此の如き衰頽を來したものでありませう(ヒヤク)力次第によりてズンく出世の出来る規則であるから一番の *Fürstbischof* などは、其の年給は何程かと云ふに獨逸で云へば一萬八千マルクで日本の金に直せば七百何拾圓の月俸に當ります、逆も日本の坊さまの、三錢や五錢のお布施の貰ひためて生活を計るやうな低くい生活にあらせ折角に貰ふた御布施で車に乗れば其日の暮らしに差し支へるやうなこと、は大違ヒ(飛來大笑)彼の國のお坊さまは二頭引きの馬車位に打ち乗りホイく云はせて高尙なる生活を爲して居て日本の坊主の如くあの賤しい生活は致しては居りませぬ、シテ其の腕の力から次第で

力らが大なれば大寺に入り力らが小なれば小寺に入る謂は
 い力ズクの事故に各の僧侶が益々學を勉め徳を積むのであ
 りますから宗旨は益々揚がるばかりでこの文明と共に相提
 携して、其尖先に立てゆくことが出来るものである併しなが
 ら日本今日の宗旨はと云へば人民の開化進歩と相伴ふ能は
 せして却つて其の下に位して僧侶の本分をも忘れ恬として
 之を顧るの有様なきは是れ何故かと云ふに安臥坐食して其
 の生活を遂げ得ることの出来る血脈相續のある所以である
 (大喝采)

次ぎは法脈相續諸君は試みに大きな眼を開いて日本八宗の
 有様を眺めて御覽なされや此の法脈相續と云ふには是れ亦
 た學問相續に非せして、其の師匠坊様の跡は必き其の弟子坊
 様が嗣ぐ之れを法脈相續と云ふてろうして其の弟子坊サマ

の出て來たる工合ひは學問卒業の上から出て來たる者にては
 なしに百姓の倅や商人の息子からズルくと出たものにし
 て其のお坊様の出方を調べて見れば例へば百姓にすれば田
 地の三十町歩も持て居て小作人も澤山あり下作の年貢はキ
 チンと上へ納めねばならき其上へ多くのこやしの買ひ入
 れから又た人の使いこなし方等に至るまで中々骨の折れる
 役である所で其家と云ふものは總領の息男と次男とあるが
 ドウも總領は次男はどに利口でもないから逆もこの家の相
 續は覺束ない不憚だけれども總領は餘所へやつて跡の相續
 は次男に譲らねばならぬがまわどうしませうか前さんに善
 き考へがありますかと問はれて其家の親父どんはサアか前
 の云ふ通り奈何にも總領を廢するのはムエタラしいが去り
 とて家の大事に代へられんではないかと云ふ氣弱な母親は

涙を浮め水鼻をす、り乍らお、ろんならよい考へがござり
 ますわれはいつその事か寺へ頼みか弟子にしてもらふでは
 ありませんか坊さんと云ふものは随分世間へ出ても貰まれ
 るしわの子も左程苦勞もしますまいからとて是れから寺の
 住持に弟子入りを頼む先祖代々の家業を相續する事が出来
 んからと云ふて弟子入りさせるのである(大笑)即ち親父より
 傳はつた三十町餘の田地を持つ所の家政が執りかねると云
 ふ所から寺へ入れて坊主にする其のお坊主が即ち今日々本
 八宗のお坊様であるあるじや子(大笑)諸君は之れを如何に
 思はる、や僅に三十町の田地の支配の出来ぬ位ひの者が一
 ケ寺の住職と爲て何んで四千萬の人心を與り知て其の上に
 立ち文明と相ひ伴ない國の力となる事が出来ませうをや
 (ヒヤ〜)是れ即ち學問によらざる所の法脈相續でその法脈で

さへわれればよしや學問がなくとも一ケ寺の住職と爲れると
 云ふ一つの頼むものがある故にその爲めに役立たせの坊サ
 マが澤山出来た宗旨の廢頽を來たしたる原因と爲る(ヒヤ〜)
 斯くの如く宗教の衰頽を來したる上の血脈相續の欠点并び
 に法脈相續の欠点あるが故なればこそ遂ひに宗旨の衰頽を
 來たし世の識者の輕呑を蒙むることに爲たのでこの北島は
 そこを思ふて奈何にも痛悼至極と存じたから何卒してこの
 欠点を學問相續に仕替へられることならばと深く慮る所わ
 りて本山に向てこの旨を數度建言に及んだなれど頑習の久
 しき遂に用ひられなかつた夫れで從來の宗旨の System 即ち組
 方即ち行政では到底此の今日の憲法政治と相伴ふて歩るく
 ことは能はざると觀念しましたから出來たのが即ち此の一
 枚の圖面である

は勿論である其の精神を修むるにつけて一方に於ては内に向ふて信心々條を堅固にし一方に於ては外に向ふて外を修め第一に學問第二に寺の會計を定め第三に寺の憲法を定めることが必要であると云ふは外でもなし、日本宗旨の衰へを來せし所以は全く僧侶が外に向つて外を修むることを知らせ第一の學問を研くを餘所に見做して只法脈血脈の相續に依頼したるより、無學となり無職となり、無氣力と爲り、貧乏と爲りて、遂に識者の容れざる所となり、其の會計の取り方は徒らに僅かなる貫ひだめを以て、卑屈なる生活に甘んじて畢竟はと云へば僧侶も僧侶なり人民も亦人民共に寺の會計の立て方を知らざるなりと云はざるべからせ(エヤク)何にも北島は諸君に向て悪口を云ふではない又た僧侶に對して悪口を云ふでもないが云はねばならぬから云ふのである(エヤク)

然るに今日日本八宗の有様を見るに今日改む可きを改めせしめてあつちに固まりこつちに團まり佛教演説じやの佛教講義じやのと坪違ひに騒ぎ廻て居るが未だ一人としてこの北島が共に談せるはどのものはなひじやね此の方とても固より一人で斯れを諸君に訴へたくはなけれども何を申すも畢屈無氣力なる日本各門の僧侶たち今や我四千萬人心の他國に徹らぬやう心懸けねばならぬのに其の爲す所出だす所を知らせして閑味眠るが如き有様これではならぬ仕方がないと思ふにより北島が血の涙を流して何卒上は天子の御配慮を補け下は人民の文明の尖先に立てゆかる、やう致さんと思ふのがこの北島の精神である(エヤク)大喘悉るれに何ぞや右申す通り今日僧侶の爲す所を見るに或は佛教演説じやの耶蘇退治じやの或は寺の學校建築じやのと下らぬ坪違ひなる演説

學校ではとても此の大体を挽回することば覺束なし全く奥
 いものに蓋たするやふな有様じや宋の天下の滅びる時分に
 宋の天子を擁して宰相陸秀平が船に乗て進退維れ谷まるの
 時に敵の軍艦は十重二十重に之を追つ取り捲いて、スワ宋の
 天下は是れ切りでお仕舞ひと云ふ時に當りて陸秀平悠々と
 大學を引き出だして苟も天子たるものは假令ひ敵の擒と爲
 りよしや死地に陥ちいるにせよ死ぬる今わの際わまでも夫
 れ大學は治國平天下の大道なり身を修め家を齊へ國を治む
 るの大法なり決して忘るべからざるものなりと……陳ア
 漢(聽衆大笑)陛下はよく身を修め仁を行はねばなりませんと
 云ふて遂に天子をいだいて海の中へ身を投げて死んで仕舞
 ったのが宋の天下の亡びたる有様で滅法も八方もない今將
 に天下の亡びんとする時に必至になりて一方を切り破り天

下の大体を挽回すへきを計るべきに十分に觀念して船の中
 で大學の講釋とは……諸君は如何におぼしめすぞコンな馬
 鹿者はありませまい(聽衆大笑滿場をよめ)故に之を人呼んで舟中の大
 學と云ふ(ヒヤ)

それ斯くの如く今やわが佛教は廢頽するの今日將に地に墜
 ちて救ふべからざるの今日、佛教演說學校建設じやなど、願
 き廻て居らるゝは諸君ナンとこの舟中の大學と相背て居る
 ではござらぬか(ヒヤ)尙は申述べたくござりまするがそれ
 は暫時休んで休息後に辨せること、致しましやう(謹言々々)

第三

夫れ玉を知て玉を現はす所以を知らせ遂に刑罪に所せられ
 荆山の麓に泣くと云ふ事があるこれは音に名高き楚の卡利
 が人の見出だすことの出来ぬ所の玉の玉たる處を見附け出

しは出したなれども其の玉を現はす所以を知らざらざるのみか其の玉の爲めに遂に刑罪に處せられたのでありますこの刑罪は周禮に定められたる五刑の墨劓剕宮大辟の中にありて隋代に行われ唐初に至りて此の五刑が笞杖徒流死とだんく改りて來ましたのじや日本でも此刑法によりて新律綱領及び律例等を制しそれがだんく今日の刑法治罪法と爲つたのじや私は明治六年の頃法律學校を建てまして自分も明律等を講じましたが亞細亞の法律では隨分世の法律家にも劣らぬつもり右の學校は今日名前が改て明治法律學校と爲て居るあれはもと私の建てた學校でありますれば備わいて今此卞和の例を引て云ふは外ではなし今や日本の各宗の僧侶たちは其の佛教の玉たる所以を知りて其の玉たる所以を現はす事を知らせして其の足を伐られて足とは足

頸から斬られる罪で即ち刑罪のとである(荆山の麓に玉を懷いて泣くと同じ有様である是を云ふは……私は全地球上を大概あるいて來ましたが其の天竺へはいりました節彼の北天竺の ^{ベナレス} Benares 府にありまして大歴史家なる「パ子ルゼー」云ふ學者を備ひまして凡そ印度三千年來の歴史は悉く取調べて先づ天竺の歴史はホト聞き盡して承知いたしたり然る所歐羅巴は先づ概して之を云へばその ^{フィロソフィー} Philosophy は十三通り計りしかない所で印度へはいつて其の精神學上の實際を調べましたが大凡 ^{フィロソフィー} Philosophy 家たる者九十餘通りあるじやねエ、エライものだ其の數々の九十餘りをば先づ概して一口に云へば我と云ふ一ツの我に歸するものにしてその我と云ふは何にかエ諸君の内を知てるものがあり升か、何にする爲めに出來たものかエ、能く……氣を附けなされや、我とは我れにして一切万

物の大本でなるのじや、即ち我とは誰れか我れでない人がありまじやうや、我れとは俗に云ふと私しぢや、此大勢の中に私でない人があらうか、………獨逸では「イギリス」英吉利では「支那」日本では我と云ふ

私が先刻ナニしましたとか、私に鳥渡百圓貸して下され話の始から終りまで、私物事の決着するにも、私、私、朝から晩まで私と云ふことを何返云ふて話をするやら殆ど數へがたき位である一年の内一生涯の内に幾百萬、私を云ふつもりか幾百萬云ふても盡きぬが私、私は矢張私じやねエ(大笑)それで私は今日の我れ、我れは私にして我れを修むる大原が即ち我れなりけりじやねエ(大笑)

夫れ Geographie の地理學は地理を取調べる學問にして Astronomie の天文學は天文の理を研究し Physikwissenschaft の物理學は物理

の事を調へ Chemiewissenschaft は舍密の法を究め Staatswissenschaft の政治學は政治の事を研究する學問である併し乍ら我れとは我れの我れたる所以を修める大原じやんじやねエ、所で私は今まで我れの斯くの如くまでに尊きことを知らなんだ、然るに世界周遊中歐羅巴にてのあらゆる Philosophie 家や、又有名なる Professor 等に逢ふて此の我れと云ふことを討究辨論致して見ましたが、あれほどの歐羅巴に誰れ一人として我れと云ふことを能く知りた人が有りませぬ、我れは我れに相違ないに極つて居るが、さて何故に我れを我れと云ふのか、又道理なしに人間自ら我れと云ふものか、流石の大學者 Stein 氏までもこの我れの返答には困たゝねエこの事は法界獨斷にくわしく書いてあります、夫れ故にこの我れと云ふことは借もエライ道理を持って居るものと思へば思へば我が大聖釋尊の説は寔に

深遠高妙なるものかなど、心に深く驚いて夫れより Stein 氏に
 この我れ即ち私の事即ち眞の Indische Philosophie の道理、眞の世界
 造化の大法に基いて説き聞かしたが、即ちこの私の我れと云
 ふ一義である、流石の Stein 氏も、北島さん私は今まで佛教の眞
 理を知らなんで居りましたがその理を承はつて實に感々服
 々に堪へぬと驚き入つて見ぬたが其の理こそ北島自己の説
 ではなし……即ち彼の Indische Philosophie の歸する所の最も高く
 最も遠く最も深き所の世界造化眞理の大法であるのである
 (天鳴 雲滿場轟く)

左すれば我れを修むる其の法に於ては、世界第一の珍寶……
 即ち世界第一の玉じや、是れほど高き Indische Philosophie の珍寶を
 持ち乍ら日本入宗の各門僧侶がそれを珍寶なり、尊き玉なり
 と知り乍ら、其の玉の玉たる所以を現はそ所以を知らぬ(天鳴 雲)

現はす所以を知らぬから玉は却て無益物なり……玉を持ち
 乍ら、其の玉たるや現はるゝに由なくして、益す衰頽せんとす
 るこの佛教……それを現はそ道を知らざるが今日の人々に
 して、徒に荆山の麓に於て泣くのみなりけりじやね(エヒヤク)
 嗚呼痛しいかなや、悲しいかなや、北島が血の涙をこぼすのは
 此に有るのじや、其の衰頽は玉を現わす所以を知らざる所
 にあるのじや夫れ故にこの玉の玉たる所を現はして僧侶の
 面目を改めたならば日本四千萬の人心は萬更に他國の手に
 渡しはすまいよしや條約改正内地雜居と爲ても、お互ひの精
 神は他國に渡すまい他教に蹂躪されぬであらう、さうしたな
 らばこの大切なる人心を修めてわが帝國の國体を健全にし
 國力を高めて天子を守り我を守つて萬代變はらぬことに爲
 るのである(天鳴 雲) 諸君ドウですか分りましたかねエ(分りました々々)

とさげさ

夫れで我れとは、我れを修めるの大本じやろの我れを修めるの道に二通りある、我れくの精神を修めて行くに二通りある一つは大路一つは小路即ち大きい道に小さい路、大きい路は我れく精神の本街道と云ふべきもの一つの小路は捷徑で即ち小路じや即ち精神のゆき途は本街道と小路の二つに分れて居ることは其區別判然としてあるけれども是れまでの坊さんで云ふた事はない、ないが私は之を話す、話すは固より我が自己流で云ふではない、悉く世界中の大家識者と對論討究の上割り出したのである

其大家識者の先づ第一には、獨逸の Professor Zehra 氏でこの人は Sokrates 派で、中古の Kant の流れを汲みたる、歐羅巴で第一の Philosophy 家の大學者とも云はれる人、この人に會ふて、我れく

の精神はドノ道からあるいて来てドのやうにゆくのであると押しづめた所が一向に……いかな Philosophy 家の Zehra 氏も困た、ろれから前にも申した塊太利の Professor Stein 氏とワイトリンガワ村に於て七ヶ月半計り晝夜二席づ、推しづめく討論したが、この我れと云ふ我れく精神のゆき道が分らなんだのじや諸君ドウでと、諸君に我れと云ふゆき道の分るものがありませるかあるなら私の前へ出てお出でなされ、私が尋ねまじやうから……(暫く聽衆は無言) イツまでもダメツテ居るは自分の精神を持って來た行き途も、もどろ道も知らんで、イツまでもこの席の上に坐はつて居るつもりかエこの草原の大學院の敷地の……ムシロの上に天幕を張つて、イツまでも居るか……ドウじや……(聽衆無言)

早く家へ歸らずばなるまい、答へせば云ふて見やうかエ (聽衆)

諸君のあるきなさる道にも本街道と近道とがあるじや
 らうねエさうかど云ふて本街道の筋には、何んにも神もなけ
 れば佛もない、ないけれども天地間の一切のもの、出る其の
 原とに Absorbt の根原と云ふものがある、それで其の根原はな
 にかど云へば、朝から晩まで出る私、チンパン漢に云へば我れ
 なり、其のわれと云ふもの、本街道のあるきかたど云ふもの
 は佛にも頼まなければ神にもよらせして、我れ自ら進んで我
 れを修め其我れたる所以の理を悟りて、而して後に Heimath と
 云て我が精神の故郷……即ち真理の都に立ち返るじや即ち
 Absorbt の真理に達するのが是れ即ち我が精神上の本街道と
 申すのである（ヒヤ〜喝采）ドウです諸君、世界に我れはどエシイ
 ものはありませんぞ、諸君は朝夕に私、私とお茶漬食ふまでに
 遣イ散らすが、この私ほど貴いものはありません、鳥渡之れを

云へば此の我れの集れた所で天子が出来る、四千萬日本帝國の
 我れ〜の集つたのが即ち Ainepersonlichgation と云ふて天子と
 爲りたのである之を散らして云へば即ち日本人民となるの
 じやが集むれば天子と爲るのである（ヒヤ〜）これが天子の有
 る所以んじや、散らした所で人民と云ふので之れが人民の有
 る所以じや、我れの集りた所で天子がでけ我れの散りし所で
 人民が有るじやエラモノジヤ子！
 尙この我れと云ふもの、内から Walle の思ひを出だし Walle の
 思ひから上院下院が開けて來てろの上へ我れ〜の Machien
 と云ふて我れ〜の行ひと云ふものが進み顯れて政府の行
 政が開けて來たのである、然れば百般の政治の開けるのも皆
 この我れじや、
 ソコデ彼の Sociologie と云ふ寺の行政も亦この我れと云ふもの

から出たものにして Mächen の行ひの現はれた所である夫で
 又 Wolle の思ひを決するものは Mächen の行ひで、此の行ひと思
 ひとが相ひ合して形に現はれて來た所から、この精神上の大
 學院を組み立てるが北島の大學院であるのじや
 即ちこの大學にして四千萬の人心を與かり知て、歐羅巴の人
 民にも負けず劣らせ、我國の文明を助けて、この人心を一まと
 めに上下親一の親みを結び附け國の健全を計るのが即ち、北
 島大學院建設の大主意である（エヤ〜大噴飛）
 偕その精神上の本街道は我れ〜を推してあるくと云ふ、こ
 の道筋には神もなければ佛もない、只だその我れをおして我
 が Heimath なる我が精神上の故郷へ皈へる其道筋である其
 の路のゆき方ハ解深密經、瑜伽論、顯揚論、成實論に委しく説き
 明かして實に判然たる路筋である此路をば五位百法と分け

て自ら我を押しして精神上の Heimath に立ち返るのが、是れ即ち
 本街道のあるき方と云ふものである……あるはあるけれど
 も、大聖世尊かくれましましてより、凡そ三千年來、この本街道
 をあるいて、其の目的を達するものは、寔に僅々……甚だ拙し
 と云ふべし然れども、あるかにやならぬこの本街道、どこまで
 も Heimath の故郷に立ち皈らねばならぬ、イツまでも、闇がりに
 さまようてはならぬと云ふて、難行苦行の功を積むが……さ
 て其の目的を容易に達することが出來ぬによりて、何にか外
 に輕便な近道でもダンないが近道はないか知らんと云ふ所
 から、現はれたのか、即ち精神上の近道と云ふものである（諸
 々々）
 然れば本街道があるかれぬによりて止むことを得せ近き道
 小路によりて、すべりおりてあるくことを漸く見出し、其の目

的を達することが出来たのが、是れを精神上の捷徑と云ひ小路と云ふなり（エヤ）其の小路は即ち原と華嚴經に基いたる十住毘婆娑論に傳はり其の論中、第八番目の阿維越致品及び第九番目の易行品のあるきかたでゆけば初めて、容易に其の Heimath の故郷に立歸へることが出来るのであります、是れ即ち大聖世尊の深く考ふる所ありて殘し玉へる所で易行品の小路と云ふものである（爾悉）

この大路、小路何れも今日の精神の修まり、未來の精神の修まり、これをば棄て、はつておけと云ふ馬の字ならば仕方がないがこの精神學をドコへまでも修めにやならぬと思ふならば、大道をあるるか小路をあるるか、サアドチラか一方をあるかにやならぬが……ドツチもあるかぬか……あるかにや千百年のイツくまでもこの天幕の中へ入れておきますぞ

よ（大喝乘滿場劇るが如し）

併しまア事をわけて云へば、箇様なもの分り易く云へば何んでもないもの、八宗の坊さんたちは、この學問を持ち乍ら陳紛漢でやるから分らぬのである、それを斯う容易に説けば、諸君は皆、ナルホドナルホドと……臍の下に修まる（爾衆大笑）と云ふ所まで、トツクリ落ちるやうに云へば、ヂキに分るのぢやソコでソクなら其の小路をあるか宗旨は、日本で云へば何宗かと云へば淨土宗、眞宗、即ち東西本願寺、西山派、鎮西派、或はか題目の日蓮宗、などで佛様が彼方からも半分引張り、此方からも半分勤めて歩き又は丸で佛の力を頼みて側き路から其眞理に達することが出来るのである（ロヤ）

然らば歐羅巴の各宗旨は、耶蘇教始め其他の宗旨は、本街道か小路かと云へば、何れも近道をゆく小路宗である即ち日本

の念佛宗と同じことである

爰に於て余 Professor Zehra 井びに Stein 氏等に向ふて歐羅巴には十三通りも Philosophie があつたが然らば精神上の本街道と云ふものがありませうかと問へば、先生達は不思議な顔をして、北島君精神上の本街道とはドンな事かと聞く、それは小路に對しての本街道なりそんな本街道はありますかとアタマを掻きつ、私に聞く、私はあるくウん、ウん、あるかねエ、と首を捻るのみ、ソコデ私は、夫れ歐羅巴には Philosophie の數は數多、有ることばありと雖も、精神上の本街道を明したるものは一ヶ條もない……ハテ有りさうなものぢや……矢張りない……イヤある筈もない筈もないがどおしつめ、おしつめたる末に、トツト、ないことに決して、如何なる Professor も、北島君よナイ、ナイ……これはどの文明、これはどの高尚な國で有て、精神上の本

街道を説き明したものが無い、若しお前さんの方にあるならば、教へて呉れまいか……と切に請はれて、ある、ある……然らば承はらんと云ふ所から、夫れから一經三論の主義に基いて、精神上の本街道には斯くもなければならぬ、只あるものは、我れなりけり……爰に於て我れの貴き事を知り玉へ、眞の自由も眞の權利もこの本街道を知らなけりや、知れども眞の知りたとは云ひ難し(ロヤ)ソコデ先づ英吉利の Oxford maxwell 氏和蘭の Auord 氏其他の Stein, Zehra 氏等は云ふまでもなく、其他の高僧大家等までも手を撃て……嗚呼高尚なるかな、深妙なるかな……親切なるかな……Indische Philosophie の教義たる到底他教の及ぶ所に非せど、何れも驚嘆したるは、即ち我れの我れたる所以である(ヒヤ)大喝采

これはど貴き玉を持ち乍ら、その玉を現はす所以を知らせ、玉

の玉たる事を知て之を現はす所以を知らず、佛教の世界無比たる精神學なることを知てその精神を現はし、天下の文明の尖先に立て働くことを知らず、この世は兎もわれ角もわれ……この世は野となれ、山となれで少しも顧みざるが今日の八宗僧侶の有様である……（聴衆よめき慷慨の氣溢るゝが如し）ろこで私の……（と云ひかけ最早時間も過ぎますから、是れで止めにしましやうかへ）と問へば、聴衆はノックの聲張り上げて許すべくもあらず諸聴々々とよめく

そんなら一つ奮發しましやう（と云へば聴衆何れも喝采歡呼する）

甚だ面白い……忝い……（と師は涙を振ふてよろこばる……聴衆は北島師万歳……宗教改良万歳と唱ふ異口同音に……）

然らば諸君は私に問ふて曰く……私又諸君に答へて曰く……北島先生（師は打ち笑ひつゝ、マア自ら任じて云ひますと

云ひ）今日の日本の有様を何と思はつしやる、専制政治を改めて此の文明を振張し陸軍海軍を盛にする所以のものは、即ちツィマリ我國の國体國力を高めて以て我れ々々四千万の人民に安心立命を與へんとする今日本年二月十一日には七十六ヶ條の憲法の發布ありて、カラダの秩序運動を定められたるが、悲い哉や、この腹の中の精神上の心の運動の順序を立つると云ふことは未だ爲らぬ、然らば政府の憲法……人の身体の秩序は既に修まるとも寺の憲法人の精神上の秩序は、中々に定まらぬとありては、此後は如何が致そおつもりかやと、問ふであらふ……オ、能くも問はれたる哉、滿堂の諸君よ……そこじやそこじや（聴衆歡呼）精神上の故郷へ立ち皈へるには大路か小路か、何れか取らにやなるまい、成程北島は獨り立て獨りあるくに本街道でも何んでも通りもしやうが、四千万の人

民諸君は、決して獨りあるきは出来まいこの四千万の人民諸君をして、我れの我れたる所以を修めしめるにはこれが即ち *Indische Philosophie* 家の役目にして、この役目を果すことが出来なけりや、即ち是れ宗教の天下に與かる職分を盡したりとは云はれぬなれども、往かにやらぬが本街道とわき道……何方か一方を通り越ぬればならぬ、斧九太夫のやうに、どちらにもつかぬでは、いけない……左ればと云ふてどちらもすて、はいけぬ、彼の文仲子が夫れ物を決するときは、唯真理の有る所と、時機のよろしき所に従て、之を撰ぶべしと謂はれてある（大喝采）

どちらか、一つを撰んで棄てもせねば、去りもせせ、今日の文明に適する所の其の真理を取り、日本の今日に適する所を撰んで采らにやならぬと考へまするが、諸君ドウヒヤ（ヒヤ／＼場中轟く）

さうすると諸君が北畠先生鳥渡マア御待ち下さい、……然らば今日の政治、今日の文明の時に、其の真理の適する所、時機のよろしきに従て、そして其の路を通るが、マアどちらの方を行きなさるか……左様々々、諸君と共にせんとするの一筋路は……外ではなし、この一條の南無阿彌陀佛……（聴衆の喝采演説の聲をも打消さんとす）即ち一條の南無阿彌陀佛によらざるを得ぬ（大喝采歡呼叫せり）

諸君この南無阿彌陀佛を何と思はつしやる（聴衆々々）この坐中にも大學の卒業生や高等中學の人も居らりやうが、中々分りはせぬぞエ、五年や十年位の學問では、逆も分ることではござらぬ、マア五十年の辛抱じやぬエ（聴衆うなづく）夫れこの南無と云ふは獨逸の言葉で云へば *Vahrheit* 日本と言葉で云へば信即ちまことと云ふことだねエ（聴衆々々）ドウです

皆さん、まことばお嫌ひかねエ、お嫌ひならばうろを云ふかね
 エ、ウソかまことかドチラかを行かにやなるまい併し身体に
 も精神にもこのマコトを離れては、人でなし又何でもないじ
 や、南無は即ち信にして阿彌陀佛とは *Itatigkeit* と云ふて行ひと
 云ふことである、我れくゝの心のまことからからだの上に現
 はれる仕事を指して阿彌陀佛と云ふ即ち朝から晩まで働き
 一年中に働き、一生涯に働く數億萬の人民の働き集めて云へ
 ば即ち *Itatigkeit* の南無阿彌陀佛の信の行ひと爲る、諸君は今ま
 でこの理を知らぬから棄て、おいたでしやうが知れた以上は
 ドコくゝまでも、我を修めて精神の *Heimath* の故郷に達するや
 う勉むべきが是れ即ち人たる職分と云ふものである(ロヤ
 く) 又この南無阿彌陀佛ころ *Indische physiosophie* 中精神上の近道
 の大橋梁じや

然らばろんなろの南無のまこと、云ふものはどこから出て
 来たかど云ふに獨逸の *Professor Zehra* 氏の曰く、*Wohl ist*
die Vorsternung Werheit ihrem Substanzliche Ueistum と之れを譯すれば
 夫れ信と云ふものは、彼の眞理が我れくゝの思ひと共に相合
 し相叶ふて一つに爲た所のものが、即ちまこと、云ふもので
 あると

今一つ分り易く解釋すれば、世界の眞理と、我が思ひとの相合
 したる所をさして、まこと、云ふ之を天竺の *Dauskrit* の言葉に
 直せば、即ち南無と云ふのじや、其南無のまことがからだの上
 に現はれる *Itatigkeit* の行ひの人でなければこれ以てまことの
 人でなし、また、まことの仕事でなし、人にして、人にあらま仕事
 にして仕事にあらざるもの、例令ば人から金を借りて返さぬ
 もの、人のものをタゞ取ると云ふ事に爲て、云はゞ犬や猫牛や

馬の如く、最初から眞理を踐んで働くことを知らぬ人間と云はねばなるまい(エヤク)天地間の動物中、最も高尚なる人間に生まれながら、南無阿彌陀佛を知らざれば人にして人にあらま又眞の南無阿彌陀佛でない(エヤク)

ろこで此南無阿彌陀佛から人間今日の交際する人情も割り出したものである、又人間今日の智識を開くに最も必要なる教育も割り出したのであります(誦經々々)即ち我北畠大學院の出たのも、この *Indische Philosophie* の大原たる南無阿彌陀佛から出たものであります、尙これより我が大學院の主義を述べたきなれども、最早日も暮れたれば、本日はこれにて相止め何れ機會を待て再び諸君にお目にかゝる事に致しまじやう

(拍手大喝采)

大尾

明治二十四年十月十五日印刷
 全 年十月十六日出版

定價金貳拾錢

著述者

和歌山縣士族

北 畠 道 龍

東京市小石川區小石川表町百九番地寄留

發行者

大阪府平民

森 祐 順

大阪府東成郡天王寺村二千二百五十六番屋敷

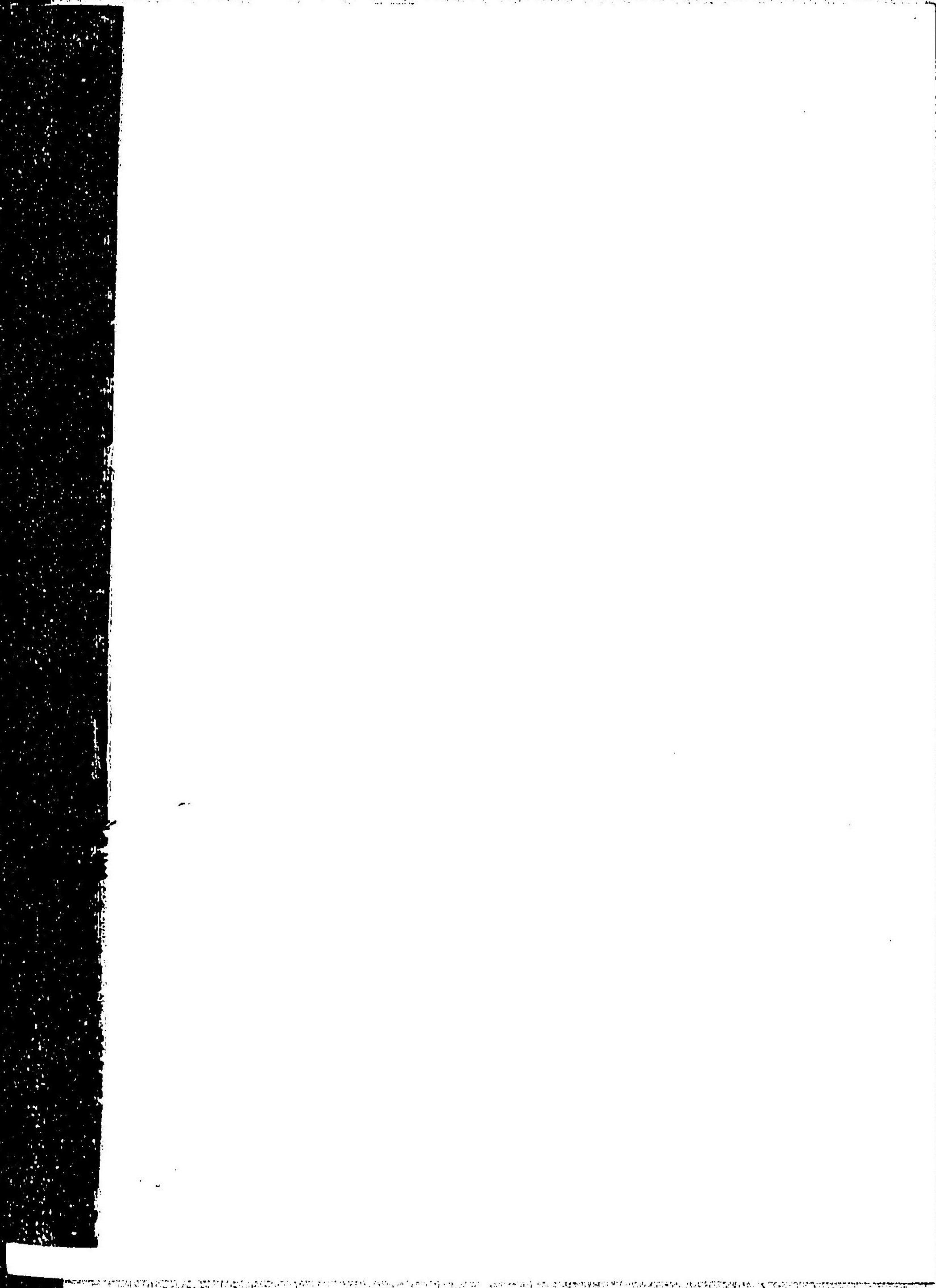
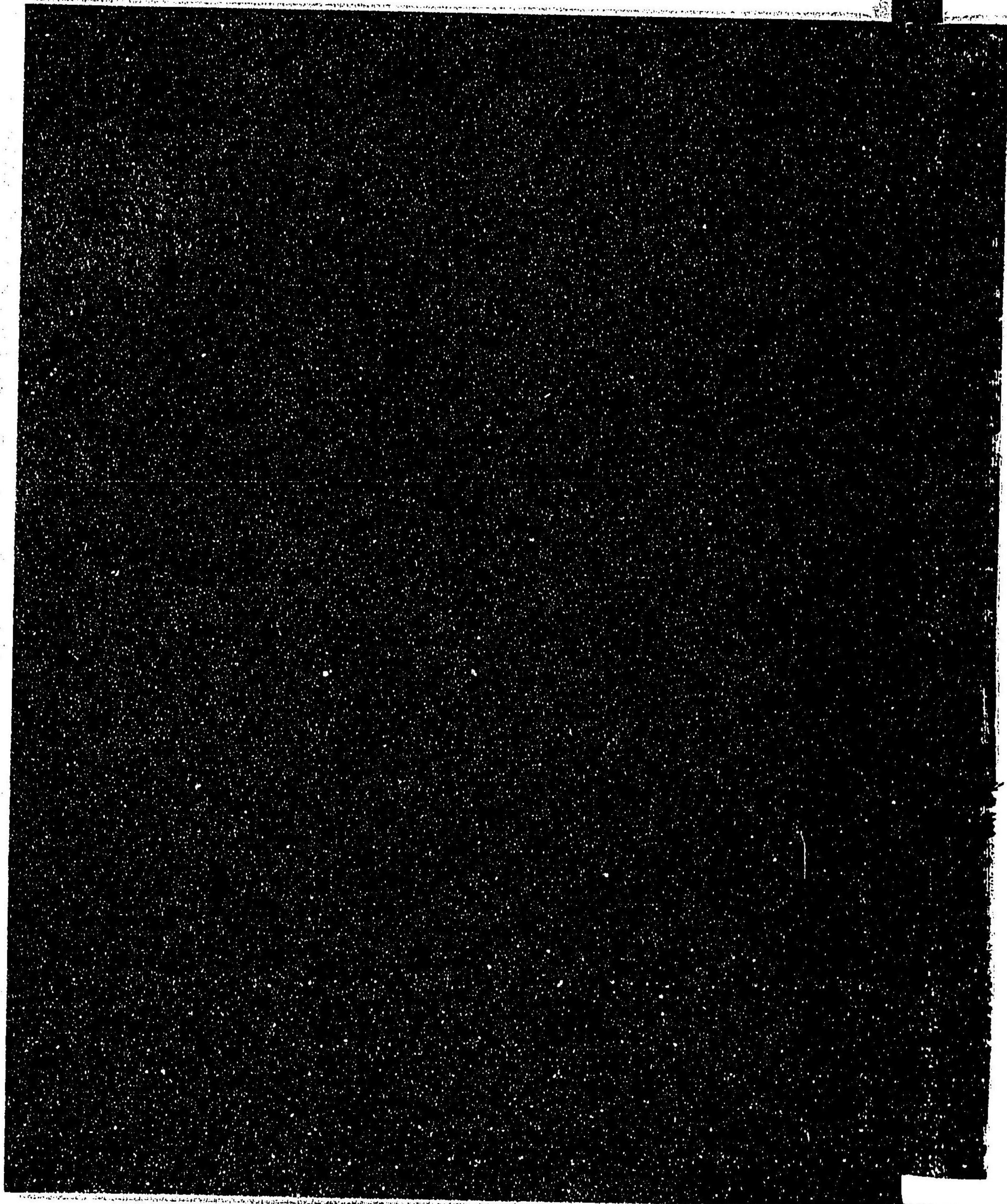
印刷人

大阪府平民

赤 川 孫 兵 衛

大阪市東區北濱貳丁目三十四番屋敷龍雲舎

EX 680



7